

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 1 6 号

2020 年 4 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (1)

佐生健光 (1927-2016)

1927 年、福岡市に生まれ、1951 年早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、大林組に入社、1967 年吉村順三設計事務所、1971 佐生設計事務所、1982 年昭和女子大学教授、2016 年 8 月 18 日逝去。

1952 年に高円寺東教会会員となったから、創設期からの高円寺東教会員の一人。大林組で出会った上司樫根英郎氏、先輩山田貞次郎氏の影響で、仏教浄土門についても詳しくあった。

建築関係の著書『もう一つの住居学』等のほかに、キリスト教関係の著書として、『キリスト教と称名』『キリスト教の望み』『キリスト教の愛』という 3 部作を著わした。これらの本は、旧約、新約聖書を丹念に読み、称名の箇所を示し、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶだけで救われる、天国へ行けるという小西先生の恵心流キリスト教の教えが、実は旧約聖書の創世記以来、連綿と伝えられてきた重要な教えであることを論証したものであり、小西先生の称名の信仰が聖書の普遍的な教えであることを弟子として論証したものであり、貴重な労作である。

今月から、しばらくの間、『キリスト教と称名』より引用する。

小西先生と称名 (1)

信仰について

「信仰は易しい、心を 180 度転換すれば誰でもできることである」

と。私は若いころ、何度か教会で牧師先生や先輩からお聞きしたこと

があった。

しかし小西先生は「信仰は難しい。難信の法である」と言われた。
信仰は易しいのか、難しいのか、どちらなのだろうか。

私は小西先生の言われたとおり、「信仰は難信の法」だと思う。先生がひかれた例の一つを述べてみよう。

イエスは、次のように言われた。「よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれるものでなければ、そこに入ることは決してできない。」(マルコ伝 3・15)

妄念、雑念と信仰

私の心には多くの妄念、雑念がはびこり、幼な子のように神の国を受け入れるのを邪魔している。こんな信仰で私は救われるとは思えない。神の国を受け入れるためには、純粋な信仰をもつためには、どうしたらよいか。そこに信仰の難しさが存在するのだ。

純粋な信仰、正しい信仰をもつために我々は精進し、努力しなければならないのだろうか。私の目には、禅僧が悟りを得るため、ひたすら座禅に没入する姿が浮かんでくるが、我々もそのような修行が必要なのだろうか。…すると信仰はいよいよむつかしくなる。信仰によって救われるということは、私ごとき者にとっては不可能となる。

まさに「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（歎異抄）である。妄念、雑念に満たされた信仰しかない私は、神の救いからもれた存在となる。

心の貧しい人、罪人が信仰を頂ける

しかし、パウロは、次のように説いている。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身より出たものではなく、神の賜物である。」(エペソ 2・8)

また、パウロは次のように言っている。

「神はこの世の愚かな者、身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を選びたもうた」と。(コリント前書 1・27、28)

この言葉を、私は精神的な意味として捉える。「無きに等しい者」とは「心のうちに何もよいものがない者」つまり「心の貧しいもの」と言ってよいであろう。

しかし、イエスは心の貧しい人たちは、幸いである、天国は彼らのものである。」(マタイ伝 4・3) といわれた。そして「わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」とも言われた。

ここに、神から信仰をいただく資格は、心の貧しい人、罪人であることが示されているのが分かる。

それでは、この信仰の内容はどのようなものなのか。私たちは、われらの師・小西芳之助先生のロマ書講解を通して、次のように教えていただいた。…まず、ローマ人への手紙 3・21～26 について

21 しかし今や、神の義が、律法、道德とは無関係に、しかも律法と預言者とによってあかしされて現された。

22 それは、イエス・キリストのあがないによる神の義であって、すべて信じる者に向かっている。そこにはなんらの差別もない。

23 そのわけは、すべての人は罪を犯したため、神の栄光に達しないが、

24 彼らは、賜物として、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって、常に義とせられつつあるからである。

25 神はキリストを立てて、その血による、あがないによる、宥めのそなえものとされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見逃しておられたが、

26 それは、今の時に、神みずからが義となり、さらに、イエスの贖いによるものを義とするためであった。

常に義とせられつつ

この聖句のなかで、最も重要なものを一点だけあげよう。

口語訳聖書では 22 節を、「キリストを信じる信仰による神の義」と訳しているが、この信仰は明らかに自分の信仰、人間側の信仰の意味となる。先に述べたように、これでは、自分の救いに関してさまざまな疑問が生じ、難信の法となってしまう。先生は、原文を検討された結果、「イエス・キリストの贖いによる神の義」と訳すことができると、確信をもって私どもに教えて下さったのである。

24 節は、口語訳聖書でも、このように記されているのであり、これが聖書の示す真理である。尚、「あがないによって、義とされるのである」とあるところは、小西訳のように、「あがないによって、常に義とせられつつ」となるのが正しいのだとされた。この言葉は極めて重要であり、その意味を十分に理解したい。また、口語訳聖書 25 節、26 節では、それぞれ「信仰をもって受くべき」「イエスを信じる」という語句があるが、先生は、それらを消去し、代わりに「イエスのあがない」とされたのである。

称名について

ここで、明確になったことは、私は「信仰によって救われるのではない」ということである。「キリスト・イエスのあがない」によって救われるということである。パウロはこのことを賜物であり、神の恵みであると何度も言っている。このあがないを、確実に私のものとしていただく方法として、先生は「称名」を提唱された。それは、ロマ書 10・9～13」に基づく。

12 ユダヤ人とギリシャ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。

13 なぜなら、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」とあるからである。

「主のみ名を呼び求める」ことを称名というが、ここで称名する者は例外なく救われるというのである。称名は、聖書の至る所に出てくる言葉である。新約聖書では、このロマ書のほか、使徒行伝 2・14～21 などがあるが、コリント前書 1・2 などによると、初代教会の人々は、日常至る所で御名を呼び求めていたことが分かる。

旧約聖書の称名

旧約聖書にも称名の言葉は多く、新約聖書に引用されたものは、ヨエル書からである。

ヨエル書 2・31～32

主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変わる。
すべて主の名を呼ぶ者は救われる。

詩篇 50・15

悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたは、わたしをあがめるであろう。

イザヤ書 30・19

シオンにおり、エルサレムに住む民よ、あなたはもはや泣くことはない。主はあなたのよばわる声に応じて必ずあなたに恵みを施される。主がそれを聞かれる時、直ちに答えられる。

旧約の時代、新約の時代を通して、その民は主の御名を呼び続けてきたのである。そして、救われてきたのである。

横川法語

小西先生は聖書の称名を仏教浄土門の念仏と対比された。そして、我が国仏教浄土門の始祖といわれる源信、恵心僧都の称名の方法をよしとされた。それは、恵心僧都の残された横川法語よかわに書かれている。

まず三悪道を離れて人間に生まるること大きな喜びなり。身は賤しくとも畜生に劣らんや、家は貧しくとも餓鬼に勝るべし。心におもふことかなはずとも地獄の苦に比ぶべからず、世の住み憂きは厭ふ便りなり。このゆえに人間に生まれたることを喜ぶべし。

信心あさけれども本願深きゆえに、たのべば必ず往生す。念仏ものうけれども称ふれば定めて来迎にあづかる。功德莫大なるが故に本願に遭ふことを喜ぶべし。

また云く、妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念の他に別に心は無きなり。「臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞ」と心得て念仏すれば、来迎にあずかりて蓮台に乗ずる時こそ妄念をひるがえして覚りの心とはなれ、妄念のうちより申しいだしたる念仏は濁りにしまぬ蓮のごとくにて決定往生疑あるべからず。

(浄土真宗聖典より)

ストレプトマイシンのたとえ

小西先生は、称名のことを、救いをいただく方法といわれた。結核を直すストレプトマイシンは、この薬を飲めば直ると聞いてただ飲めばよい。精神を集中して飲む必要もないし、力んで飲む必要もない。そして、称名をストレプトマイシンを飲むためのストローに例えられた。先生はこの信仰を恵心流キリスト教と言われた。

それは信仰も、行ないも落第生である者が与えられる恵みの賜物である。このような有難さを、我々の先祖の残した言葉で味わうことができるのは、日本人に生まれた喜びというほかない。恵心僧都の後輩に法然、親鸞がおられる。我々に分かりやすく書かれた著書に、法然の「一枚起請文」、親鸞の「歎異抄」があるのは周知のとおりである。いづれも念仏と往生について、その勘所が述べられたものであろう。仏教においては、このように称名について豊富な資料と、長い歴史が存在するが、キリスト教では、歴史上そのあたりの消息はどうなっているのだろうか。

小西先生は「キリスト教の歴史において『主の名を呼ぶ』ことの真理がまだ明らかにされていないのは残念である」と言っておられる。

佐生訳横川法語

私は、この「横川法語」を我々のキリスト教に当てはめたものを作ってみたので、以下に述べてみたい。

まず、人間に生まれたことは、大きな喜びである。神により、人間は永遠の生命を生きる望みを与えられたからである。身は賤しくても、家は貧しくても、心に思うことはかなえられなくても、歎くには当たらない。そのような者こそ救いの近くにいるからである。世の中には多くのいまわしいことがあるけれど、それが永遠の生命を望むてだてとなる。だから人間に生まれたことを喜ぼう。

信仰がなくても、主が十字架にかかり給うて私たちの罪を贖われたので、主の御名を呼べば必ず救われる。御名を称えるのは物憂いが、称えれば必ず主がお迎えにこられ、復活にあづかることができる。この賜物は人の思いをはるかに超えるものだから、私たちは主のものとされたことを、大きな喜びとしなければならない。

もう一言。妄念はもとより、罪人の身そのものから出たもの、だから心は妄念のほか何もないのだ。「死に至るまで、私は妄念に

満たされた罪人だ」と心得て主の御名を称えれば、復活し、主の御許に召されるのである。その時こそ、罪の身は全く清められ、全てを悟ることができるのだ。罪の身このままで称える主の御名は、聖霊によって清められ、私たちは神の国で永遠の命を頂くことができるのである。このことは決して疑ってはならない。

(この文章は、「横川法語」を下敷きにして、主として、創世記1・27、マタイ伝6・26-29、ロマ書8・26-28、同10・13、同11・33、34、ヨハネ伝14・2-3、同16・22によって構成された。)